PR

信州シンポジウム 報告

(信州シンポジウム報告(信濃毎日新聞-1990.11.26

世界も日本も歴史的な転換期に差しかかっています。そこで、ふるさとご出身の著名人を講師に招いて信州の近未来を考える「信州シンポジウム」が十一月十六日、長野市内で開かれました。このシンポジウムは信濃毎日新聞社が主催し、長野県、長野県経営者協会、長野県商工会議所連合会が後援、日本アイ・ビー・エム株式会社が協賛しました。あらましを紙上でご紹介します。

信州を世界的視野で

岡村　現在のような激動の時代はグローバルな視点でものを見ることが大切だ。お集まりのパネリストはそれぞれの分野で一家言お持ちの方なので、国際的視野から信州の近未来をどう考えていったらよいのか伺いたい。

影山 裕子さん

脱社会主義、脱冷戦は世界を変えた。いろいろな民族が国家を越えて自己主張を始めている。世界がますますボーダレスになってきたことを踏まえて、信州はどう対応すべきかを考えなくてはならない。

岡村　今後の日本を考える時、女性の力なくしては展望が開けない。その視点からどうぞ。

女性進出、教育に後れ

影山　一九八〇年代は女性の時代と言われ、女性はあらゆる分野に進出した。ちなみに長野県の場合を数字でみると、県庁で女性の課長が二名、全国十九位。支庁、地方事務所ではゼロ。長野県はその点では後進県だ。県議も一人もいない。学校長では小学校が五人で三十七位。女性教師の数でも中学校では最下位だ。

国の方針としての女性の進出はほぼ目標を達成している。私のいたNTTでも能力が同じなら女性を先に昇進させている。長野県でももっと女性の能力開発に努め、社会的活動を図れるはずだ。

出身を聞かれ、「長野県です」と答えると、必ず「あの教育県ですか」と言われる。自分でも全国一だと自負していた。しかし、今回調べてみたら、小、中、高ともに最下位に近い数字しか出てこなかった。これには驚き、悲しくなってしまった。原因はいろいろあるにせよ、レベルアップのために近未来に全力を注ぐべきではないか。三十年先には「長野県は教育県です」と胸を張って答えられるようにして欲しい。

■パネリスト
和光大学教授・評論家　影山裕子さん
東京外国語大学教授　中嶋嶺雄さん
画家　原田泰治さん
長野経済研究所専務理事　福沢誠さん
■コーディネーター
信州大学教授　岡村勝司さん

岡村　次に長野県の実態を具体的に。

首都機能移転先にも

福沢　信州の十年後、二十年後を考え、ある人は「恩田木工の時代は銅、現在は銀、二十一世紀には金になるだろう」と言っている。歴史的には本日の講師の井出先生のエッセー『道と文化』に中山道は主要幹線道路だったから黒船の到来は京の都より信州のほうが先に知ったという話がある。鉄道時代に入る時、中山道鉄道という計画があったが東海道に変わってしまった。信州は陸の孤島として取り残された。

福沢　誠さん

しかし、ようやく長野自動車道、上信越自動車道が進み、更には新幹線の開通、三ヶ日から飯田への三遠南信道や、清水から佐久への中部横断道の計画などもあり、松本から高山、福井への中部縦貫道の計画も認められつつある。こうなると陸の孤島から一気に全国トップクラスの高速交通県になる。これにより内陸地の新しいフロンティアが生まれる。

農業県としての長野県もそれによって変わる。野菜、果樹の出荷がスピーディーになり都市近郊型になる。また、リゾート開発などにより都市化が進むと人口が増える。

もう一つの大きなモチベーションは一九九八年の冬季オリンピックの開催だ。この決定は来年六月になるが、初めは行政主導型だったが、今は民間ボランティアが頑張っている。地域のこうしたモラルアップは近来にない盛り上がりをみせ、将来は世界への情報発進基地になれるものと思う。

今、心ある人は「さよなら 東京」をしたがっている。その候補地として信州は最適だ。自然があり交通の便もよくなる。広い土地もある。

岡村　会社人間でなく、個人として地元で活躍している原田さん、どうぞ。

信州の宝は自然

原田　信州に住み、信州の絵を描いて仕事をしている。感謝しなければならないのは信州には自然の素晴らしさが残っており、温泉や美しい高原や湖や宝がいっぱいあることだ。大学を終えて帰って来たばかりのころは仕事もなく貧しかった。昭和四十八年にユーゴスラビアで素朴画というジャンルの画家たちが農業をしながら描いていることを知り、自分も仕事の無いことを嘆くばかりでなく、身の回りの美しい信州を描くべきだと熱い思いにかられ、それからユーゴの画家たちと交流するようになった。

原田 泰治さん

ユーゴスラビアの湖ではガソリンを使ったエンジンは無く、バッテリーで船を動かしている。湖には水鳥の音とオールをこぐ少年たちの声しか聞こえない。信州でも全国に先駆けてソーラーシステムの船を浮かべるなど、クリーンな自然の提案をしてもよいのではないか。また、開発してはいけない自然を残していくことが、これからの宝という気がする。

先ほどの基調講演でも、動物たちと共存していた時代があったという話から、足元を見つめ直す必要性という素晴らしいテーマをいただいた。それと同時に高齢化ということを考えたり、障害者のことを考える時、開発にも思いやりの心が欲しい。心温まる風景を作り出すことが今後の信州の未来につながると思う。

殻を破れ、信州人

中嶋　信州人はよく『信濃の国』を歌う。だが、あれはなんとなく閉鎖的で、自己中心的なところがある。その辺りの殻を破らないと長野は通過地点に過ぎず情報発信基地にはなれない。根拠地として必要なのは、一つには自然だ。郷里の松本に帰り、コンクリートで固められた川を見るたびにぞっとする。これからはもっと上手に自然と共存することだ。

岡村 勝司さん

もう一つは文化と教育だ。長野県が教育に力を注いだのは貧しかったから。政治では薩長土肥にはかなわなかった。だから、勝てるのは文化、教育だった。信州大以外に個性的な大学をという話が出ても良いはずだが、それをしない。松本には私の子供のころから鈴木メソードがあり、私もバイオリンを習った。あそこは世界へ向けて発信している。しかし、地元の見方はきつい。信州は根本的に考えなおさなければならないのではないか。

どこでも発信基地に

原田　川の護岸工事にしても、ブロックの中に草を入れ、やがて普通の川岸のようにするなどということを長野県が考案し『信州ブロック』として全国に売り出すくらいのことを考えてはどうか。ユーゴスラビアの画家が言葉のお土産を残してくれた。「球の中心というものはない。原田泰治、お前が諏訪で情報発信すればそこが中心になるんだ」と。

影山　信州は自然以外に誇れるのは教育なのだから、学力が低下したと言ってクラブ活動を廃止するなどと言った短絡的なことを考えず、ちゃんと両立できるよう、しっかり頑張ってもらいたい。

岡村　長野県がいかに美しい自然を持っていようとそれを生かすのも駄目にしてしまうのも人間だ。持てる宝を磨く人間をいかに育てるか、そういう風土をいかに構築していくか、その三つ子の魂を作る間の教育が将来の長野県をつくるのではないか。最終的には人間が宝なのです。

信州の近未来をどう築くか

基調講演

架橋（かきょう）——歴史から未来へ

作家　井出孫六さん

昨年から今年にかけて、世界の状況は目まぐるしく変化しました。フランス革命から二百年という年に、ソ連のペレストロイカ、中国の天安門事件、ドイツの壁の崩壊と、テレビの前にくぎ付けにさせられる出来事が続きました。

一方、わが国では正月早々の天皇の崩御に始まり、リクルート事件、わずか三カ月の間に総理大臣三人の登場などということもありました。今年に入ってからはクウェート問題です。

これらの激変、中でも東欧の変化は社会主義世界が一つの壁にぶち当たったという特色を示しています。一方に資本主義世界があり、その一方に社会主義世界があるという二十世紀の一つの仕組みがまさに二十世紀の終わりに破たんしたのです。そういう世界史的な転換の中で、私たちは今、十年前、二十年前とは違った意識の中に立っています。

六年前、たまたまソ連とアメリカにほぼ同じ時期に行く機会がありました。モスクワは二十年前に訪れた時とほとんど変わらず、泊まったホテルもそのままでした。けれども何だかすき間風が通り抜けるようなうそ寒さを感じました。

同じようなうそ寒さをニューヨークの通りで家を失った人々を見て感じました。これはアメリカとソ連のロケット競争の結果ではないかと思ったのです。考えられないような巨費を宇宙に打ち上げたツケがうそ寒さになったと感じました。

日本にはそういうそ寒さはないと思っていたのですが、最近、感じ始めました。私は一年の半分は信州で暮らし、信州のお年寄りたちともよく話をします。そういう時に、このうそ寒さを感じてしまうのです。

信州には六十七の村があります。そのうち四十五の村は高齢化率が二〇%を超えています。フランスでは高齢化率八%から一二%になるのに百年かかりましたが日本は二十年で到達しました。この傾向はこれからも広がってゆくでしょう。

そんな村の小学校で教べんをとっている若い先生と話をしました。彼は「村で一生懸命子供たちを教えると、彼らはやがて中学校を卒業し高校へ行く、高校をでると大学へ行く。そして彼らは決して村に戻って来ない。私は今、一生懸命やればやるほど、村の崩壊の手伝いをしているのではないか」と問題提起をしたのです。私は答える術を知りませんでした。そういう現状を踏まえながら、どうしてそんな構造になってしまったのかを振り向いてみたいのです。

小林一茶という俳人がいます。信毎の一茶全集には一万八千句収められています。芭蕉は千八百句ですから、十倍ですね。ご存じのように、一茶の句には、カエル、スズメ、ノミ、シラミなど小動物が数多く登場します。

芭蕉にも「古池や　かわず飛び込む　水の音」という有名な作があります。しかし、この場合のカワズは静けさを引き立てる小道具でしかない。ところが一茶の方は、カワズはもちろん、ノミやシラミと共にくらしていたという感があります。身の回りを詠み続けて彼は農民の美を作り出しました。

また、信州のお年寄りからこんな話も聞きました。「昔は馬は家族同然に大切にされていた。馬はワラの上に住んでいて、そのわらはたい肥となって使用される。一つの無駄もない」と。確かにワラ「藁」という字は木より高い草と読めます。米から藁、そしてたい肥と見事な自然の循環があります。

宇宙航空研究所の三浦教授は「ワラはよい加減な素材です。でも宇宙へ持ち出すのは石油から作られたビニールのようなものばかり、いずれはワラのように自然に返せる素材を研究する必要がある」と話してくれました。

いつの間にか絶たれてしまった物と物、人と人、人と物のつながり、それをどうやって取り戻し、どうネットワークづくりをしてゆくか、それが信州の近未来を考える上の一番大きな問題ではないかと思います。